

# 歴史館だより



- 河北町谷地城跡の発掘調査
- 山形市へ新たに寄付された最上義光文書をめぐって
- 最上義光歴史館サポーター「義光会だより」No.11
- 最上義光連歌の世界⑤
- 研究余滴② 義光と寒河江肥前守の辞世

No.28  
2021年3月発行



最上義光歴史館

# 河北町谷地城跡の発掘調査

天本昌希

## はじめに

現在の河北町谷地地区に所在した谷地城は、白鳥十郎長久の居城である。白鳥氏は現在の村山市西部に本拠をもつ国人で、その出自については謎が多い。長久の頃、天正二年（一五七四）の「最上の乱」における伊達氏と最上氏の和解を仲介、中央政界には織田信長に名馬を送るなど、巧みな外交術で頭角を表す。これに危機感を覚えた最上義光は、天正十二（一五八四）年に谷地城へ侵攻、白鳥氏は滅亡となる。

このときのエピソードとして、義光は病氣と称して山形城に長久を呼び出し、彼を謀殺。そのまま三千の兵を率いて谷地城を落としたと、軍記物では語られる。この逸話が後世の様々な物語で語られる義光の狡猾で残忍な人物としてのイメージのもととなり、長久の返り血を浴びたとされる「血染めの桜」伝説につながっている。しかし、実際にこのような謀殺劇があったことを示す史料は軍記物以外、残されていない。ドラマチックな物語を抜きに当

時の状況としていえることは、白鳥長久が外交を駆使して義光の地位を脅かすまでの存在となり、討たれたという結果である。

ちなみに大石田町次年子には、白鳥長久の墓と伝えられる塚があり、過去に発掘調査がなされている。結果、大腿骨に大きな傷をもつ四十代男性の白骨が出土している。しかし、それが長久本人かどうかまでは定かではない。

この長久が築いたとされる谷地城は、文献上、築城の時期が明らかではなく、最上侵攻の前年一五八三年以前とされるのみ。最上領有後は、斎藤伊予守が四千石で城主となり、最上方の支城のひとつとして機能した。慶長五年（一六〇〇）の上杉方との出羽合戦の際、一度は上杉方に奪われ、それを再び最上方が奪還するという拠点争奪戦の舞台として登場する。その際の様子を伝える記述として、「七日の間、城けんごにもち候へ共」や「二の丸迄敵押込み申し候所押返し」など、激しい籠城戦となったことが窺える。最後は元和

八年（一六二二）の最上家の改易と共に廃城となっている。在りし日の谷地城の姿を伝える絵図はなく、廃城から六十七年が経過した元禄二年（一六八九）の「谷地本郷絵図」に現在の三社宮付近が「古城跡」と記されるのみである。

史料が限られる状況において、発掘調査成果は重要な情報源となる。遺跡としての谷地城跡は、『山形県中世城館遺跡調査報告書』第2集に掲載され、現在の河北町谷地地区の市街地全域に渡る広大な遺跡として知られている。この遺跡範囲内に立地する河北町役場を建て替えることとなったため、建設予定地の発掘調査が令和元年五月から八月までの期間で実施された。これは谷地城跡では初めての大規模な発掘調査であり、その成果は既に発掘調査報告書として山形県埋蔵文化財センターから刊行されている。ここではその成果についてまとめる。

## 特徴的な建築方法の発見

発見された主なものは、五百基を越える柱穴と溝跡である。柱穴はいくつかがセツトになって建物を構成し、溝跡は建物群を区画するためのものと考えられる。当時の建物は、掘った穴に柱を埋めて建てる掘立柱建物が主流である。柱材は建替えの際に抜き取られ、腐ってなくなってしまうたりす

る。そのため、遺跡には柱穴だけが残されるのが常である。今回発見された柱穴で特徴的なのは、多くの柱穴の底面に沈下防止のため、枝や廃材などが敷かれていたことである（図1）。谷地城の立地は寒河江川扇状地の末端部にあたる。湧水も多い軟弱地盤のため、このような方法をとったのではないかと考えている。同じ目的で、柱穴の底に板や、石を敷くという事例はあっても、切りっぱなしの枝や廃材を敷く事例は、全国をみてもほかに探すことが難しい。より低コストの建築方法であったと思われる。しかし、類例は思いのほか近く、山形城三の丸跡の第十四次調査において発見された（図2）。この調査地点は広大な山形城三の丸で



図2 山形城三の丸跡



図1 谷地城跡の柱穴

第14次調査の柱穴

も西端に位置し、馬見ヶ崎川扇状地の端部にあたる。立地環境としては今回の谷地城調査区と類似している。谷地を占領した義光は、当地の鋳物師たちを山形城下に呼び寄せたとされるが、同時に大工たちも連れて行き、山形城内の整備にこの方法を持ち込んだと解りできるかもしれない。山形城三の丸では現在のところ確認できているのはこの一基のみのため、付近での調査事例の増加に期待したい。

### 谷地城の姿について

これらの柱穴を区画する溝は、調査区の軸に沿って縦横に発見されており、大小の規模がみられる。いくつがセツトになって区画をなしていたと考えられ、その区画は一部が重なっていることから、古い区画を埋めて、新しいものをつくったと考えられる。

では、この古い区画は、いつごろのものか。時期判断の材料となる陶磁器の出土が少ないため難しいが、溝の底面から出土した漆器などを炭素年代測定にかけたところ、十五世紀前半から半ばという結果が出ている。遺跡全体でみれば、これと同時にあたる古瀬戸後期の陶磁器片を一定数得ていることから、この測定結果は裏付けられる。よって、古い区画は十五世紀半ば頃から機能し、新しい区画の建設に伴い埋め戻されたと考える。現在の谷地

地区の開発は、白鳥長久か、あるいはその前代の頃にはじまったとされ、十六世紀中頃からというのが従来の説である。これに対して今回の調査成果は、それよりも百年近く前には既に、区画された屋敷地があったことを示すものとなっている。

現在の谷地地区は、南北に走る県道二十五号などを中心に二十度ほど東に傾いた軸で市街地が形成されている。今回の調査で発見された区画溝をみると、後述する新しい時期のものも含めても、その方向は現在のものと同じ軸の傾きでつくられている。これは十五世紀の中頃に谷地の開発がはじまってから現在に至るまで、土地利用が変わり、区画の変化はあったとしても、基本的な町割りは変わっていないことを示すものである。

次に新しい区画をみると、大きいもので、幅四m、深さは一m弱あり、調査区内を東西方向にまっすぐ八十m以上展開し、東側は更に調査区外へ延長し、西側は調査区の端で直角に折れて調査区外へのびている。この溝の底面からは十六世紀中頃の陶磁器片が、溝の埋まりきった上面からは十七世紀初頭のものが得られており、この区画溝の構築時期と廃絶時期を示しているものと考えられる。この年代観は、文献上、推定されてきた谷地城の存続期間

と合致するものである。ではこの溝は谷地城に関連するもののだろうか。

谷地城の姿をめぐっては、戦前から研究があり、本丸に対して二の丸堀が部分的にめぐるものや、山形城のように全体を三重に囲むものなどが提示されている。今回の調査区は、どちらの復元案でも、本丸西側の二の丸堀にあたる。そのため調査前は南北方向にめぐる堀跡の発見が予想されていた。

しかし、今回の調査で得られたものは、堀とするには規模の小さい溝跡である。考古学上、溝跡と堀跡の違いについて、明確な定義がなされているわけではないが、一般的に防御施設である堀というには、前述の規模でその機能を担えるのかという疑問が湧く。山形城と比較するには、築城の時期も城主の地位も異なるが、筆者が担当した山形城三の丸跡第十次調査において発見された三の丸の堀跡は、幅十二m以上、現地表からの深さは五mを越えている。また、これが本丸を守る防御施設であるならば、東側の本丸を守るため、南北方向になれば防御の用をなさないだろう。しかし、発見されたのは本丸に向かって一直線に八十m以上のびるものである。よって、ここで発見された溝跡は、谷地城の主たる防御施設としての堀跡とは考えられない。しかし、これらは廃城の時期に埋め戻

されているため、谷地城本体に付随して補助的な防御機能を担っていたものとも考えられる。よって、現在のところは城内、あるいは城外に隣接して築かれた家臣団の屋敷地を区画するものと推測しておきたい。

谷地城の二の丸については、冒頭でふれた出羽合戦における争奪戦の記録からも、その存在は認められる。しかし、今回の調査成果によって、これまで推測されてきた谷地城の二の丸の姿とは異なるものを想定しなければならぬだろう。

### まとめ

このように発掘調査は、机上の調査では得られなかった結果を導くことがある。文書には残されていない客観的な情報を得ることができるとは、発掘調査の醍醐味といえよう。しかし、それはすべてを明らかにしてくるわけではない。文献調査がもたらす情報に比べれば、発掘調査が伝えることはあまりにも限定的である。

発掘調査と文献調査は、両者どちらかを選ぶというのではなく、お互いの弱点を補完しあうことができる関係にある。両者の成果を統合することで、より立体的な歴史像が復元されることを期待したい。

(山形県埋蔵文化財センター

主任調査研究員)



# 山形市へ新たに寄付された 最上義光文書をめぐって

松尾剛次

令和二（二〇二〇）年二月一四日、秋田市在住の高橋秀夫氏から山形市に「天正九（一五八一）年九月一二日附最上義光知行宛行状」が寄付された。そこで、その文書の紹介と若干の考察を行う。

本文書は、すでに『山形市史料編 一最上氏関係史料』（山形市、一九七三）二五七頁、『山形県史資料篇十五上、古代中世史料1』（山形県、一九七七）五〇二頁に翻刻、紹介されており、非常によく知られた文書である。大きさは縦三一・五センチ、横四七センチで、紙は、いわゆる縦紙で使用されている。先述のように、本文書は周知の文書であるが、原文書の所在がわからなくなっていたので、今回所有者から寄贈にいたったのは喜ばしい限りである。秋田市在住というように、本文書を伝えた高橋家は、江戸時代に佐竹氏家臣であったが、最上家改易以前は、おそらく最上家家臣であったと考えられている。「最上義光分限帳」には千石の「高橋但馬」など一〇人の「高橋」がおり、

その内の一人が本文書の受給者の可能性がある。

ところで、本文書は最上義光の印判（判子）研究においてとりわけ注目されてきた。というのも、図のようないわゆる「七得」の印判（小黒印ともいう）使用における、年付けがわかる最も古い文書だからである。七得は、七徳のことと考えられる。すなわち、「春秋左伝」宣公十二年（紀元前五九七年）によれば、武の七つの徳を意味するという。その七徳とは、暴を禁じ、兵を治め、大を保ち、功を定め、民を安じ、衆を和せしめ、財を豊にするこ

とである（『日本国語大辞典』6）（小学館、二〇〇一）。義光は、そうした武の七徳を理想にし、その思いを印判に込めたのであろう。義光は、A～D型の四種類の印判を使用した。用途が限定された伝馬印のD型を別にすれば、当初は、鼎型のA型を、次にC型の七得の印を、その次にB型の使用が始まったと考えている。それらの印判の中で、もっとも使用頻

度が高く、死の直前まで使用されたのが七得（C型）の印であった。印判の使用は、義光の支配領域の拡張と、家臣団の拡大を表している。本文書を翻刻すれば、左（次頁）の様なものである。

内容は、この度の山内での戦いにおいて、走り回っての奉公を行ったので、敵として成敗した安藤九郎兵衛の領地を高橋卯鶴に末代にいたるまで支配することを認める、というくらいであろう。すなわち、恩賞として、土地を給付したもので、古文書学で知行宛行状と呼ばれるものである。

ここで注目されるのは、山内がどこかであるが、はっきりしない。『山形県の地名』によれば、「山内 古口（ふるくち）から下流、清川（きよかわ）（現東田川郡立川町）までの最上川は（約一六キロ）、出羽山地を先行、谷を形成しながら横断する。この区間は山内と称され庄内と内陸を結ぶ要路ではあったが、川の両岸は切立った崖となり川に沿って通行することは困難で、古くから舟による通行が盛んであった。現在は最上峡の名で知られる」山内かも知れない。また、安藤九郎兵衛が如何なる人物かも不明であり、今後の研究の進展を待つて筆を置こう。

（山形大学名誉教授）



D型



C型



B2型



B1型



A型



天正九（1581）年九月一二日附最上義光知行宛行状

## 解読文

今度山内之儀、走廻之奉公<sup>二</sup>

付而、安藤九郎兵衛成敗之地、

為取置候、於末代可致知行候也

義光（小黒印）

天正九年<sup>辛巳</sup>九月十二日

卯鶴殿

# 義光会だより

No.11  
2021年3月



題字 齋藤蕉石

今年度は、新型コロナウイルスの影響で、例年通りの活動が出来なくなり、制約を受けた中での活動となりました。イベントの中止が相次ぎ、館内案内も中止になりました。

しかし、こうした中にあっても日々魅力に富んだ活動をしたいと考え、その実施について内容を記します。

## 山形市コミュニティファンド

義光会役員会議で、山形市コミュニティファンドへ応募することを決めました。義光会創立以降、初めての試みで不安もありました。しかし、第一次、第二次審査を通過し、約四十万円を獲得しました。活用目的は、こども講座『ヨシアキ☆すくーる』で使用する映像を作成することでした。どうか二月最後の講座に間に合いました。完成です。映像は、山形城跡霞城公園を皮切りに、最上義光の菩提寺・光禪寺、初代山形城主斯波兼頼が創建した光明寺を巡りました。また、最上家や江戸時代の山形に関わる歴史館収蔵品をはじめ、有形・無形の文化遺産も映像に収めました。こども達には、山形固有の歴史と文化を知ってもらい、山形人

としての郷土愛を育んでもらいたいという思いで作成に取組みました。

## こども講座 ヨシアキ☆すくーる

山形市内の小学四年生を対象に、こども講座『ヨシアキ☆すくーる』を各小学校へ赴き開講しています。今年度は、山形市内の十二校で約七百六十人の児童・教員が受講しました。講座では、小学四年生の副読本の内容を中心に、山形の土台を築いた最上義光の人物像や領国経営について、映像を用いて行っています。しかし、三十分という限られた時間で、小学生に伝え理解してもらうことは、容易なことではありません。でも、少しでも、少しでも郷土の歴史や文化に興味を持ってもらい、郷土



意識の涵養を図ることができればと思います。前述のとおり、作成した映像を『ヨシアキ☆すくーる』で使用する事が出来ました。反省点もあります。が、これまでの画像では感じ得なかった臨場感や立体感を体験してもらえた様子が、こども達の顔から伺えました。また、身を乗りだして映像を見ている姿が、印象的でした。

## 現地研修

義光会の現地研修は、最上家に関わる土地を選定し、資料を作成することから始まりました。ところが新型コロナウイルスの影響により、現地研修が実施できるか難しい判断に迫られました。しかし、感染症対策として、バスを二台に分け実行しました。研修地は、尾花沢、最上方面に決定です。尾花沢では、教育委員会の方の案内で、延沢城に登りました。山頂の景色から、守りの堅固さを感じました。また、「天人清水伝説」の中に出てくる天人清水池は、四百年以上もたつのに、枯れずに残っていることに驚きました。

午後からは、今回の研修一推し、小国城へ登ることでした。折しも雨が降り出し意気消沈していると、最上町観光協会の計らいにより、公民館で最上町の歴史講話を拝聴することができました。小国城を落城させた義光は、約四十年に渡り善政を敷いたそうです。最上町は、また高名な馬産地であった

こと。義経・弁慶の伝説あり。そして、芭蕉が奥の細道の旅の途中で封人の家に宿泊して、その時の印象を俳句に詠んでいました。

## 蚤虱 馬の尿する 枕もと

最後に、現地研修で感じたことは、

領国繁栄のために、義光が川に着目した点でした。尾花沢は最上川流域、最上町は小国川流域に位置します。義光は、商業の流通を促進するために、最上川の大掛りな掘削工事によって舟運を発展させました。「水を制する者は国を制す」と故事にある様に、義光は、領民の安寧と領国繁栄に寄与したことを、再確認させられました。



令和三年三月

義光会第五代会長 田中 範子



# 最上義光連歌の世界⑤

名子 喜久雄

- 1 おる花のあとや月見る夏木立
  - 2 御簾のみとりに明(け)やすき山
- 慶長三年(一五九八)四月十九日
- 賦何牆連歌
- 初折の表

義光  
紹巴

今回採り上げた句で、短詩型文学の解釈の困難さ、別の言い方をすれば、「座の文学」と呼ばれる「連歌(「誹諧連歌」もふくむ)を、後世、その「座」に関わらぬ人々、すなわち我々が解釈することの困難さについての、考察を行う。

この発句の大意は、そのまま素直に読めば、「春の桜を手折って風流を尽し、今、夏木立の中に座り、遅く出た月を眺めて(同じく、風雅の思いを人々と共有して)いる」となる。「桜・夏の月」いずれも、和歌に詠み習わされて来た素材で、そのとらえ方も、特に目新しくはないように見える。(この点については、別見を次回記したい)

疑問を感じるのは、「桜を手折ったのは誰かという点である。前述の大意では「義光(または、義光と紹巴ら一座の人々)」となるが、これらの人々が置かれた世情を思う時、別解が可能かとも思うのである。

その前提には、第一点として先に触れたが、「座」から離れた短詩型文学解釈の難しさが挙げられる。

第二点として、その場の連衆が、その時どのような位置を社会の中で占めていたかということが考えられる。特に、義光・紹巴の師弟は、単なる文芸愛好家ではないのである。

慶長三年(一五九八)四月とは、どんな時節であったか。その直前の三月十四日には、秀吉最晩年の風雅の盛事「醍醐の花見」が挙行された。(秀吉はその後、病に臥す)「おる花」とは、この行事を踏まえている可能性を、探ってみたいのである。となると、「醍醐の花見を人々とともに寿いだ後、今、初夏の月の下、我々は風雅の時を味わっている」ほどの意となるか。うがちすぎと言うべきであろうか。

以上のように推測したくなるのは、義光・紹巴ともに、この比、権力の怖しさを改めて意識せざるを得ない状況にあったと思われるからである。

三年前の文禄四年(一五九五)の秋は、義光にとっても紹巴にとっても痛恨の秋であった。義光にとっては駒姫の死がそれに該当することは、改めて述べるまでもない。紹巴は秀次に近侍していたというこ

とで、八月十九日知行百石を没収され、近江国三井寺門前に追放となった。

奥田勲氏は「連歌師―日本人の行動と思想―評論 昭和五十一年」で

紹巴は決してすでに「連歌師」ではない。連歌師という立場を巧みに利用しつつ、権力構造の内奥に立ち入って、さまざまに紹巴なりの決定を行って来たのである。

と、紹巴と権力(秀吉・秀次)と関わりを論ぜられた。その紹巴は、権力に近づき、その一部を手にしたことの怖しさを、十二分に味わったこととなる。

彼は慶長二年(一五九七)に許されて八月七日に、帰京を祝う連歌があった。義光は、翌日八日の「木食上人応其興行百韻」に参加している。その関係のなみなみならぬことがうかがえる。紹巴帰京の後の文芸行事に参加した人々は手放しで、紹巴の帰京を喜びえたであろうか。作品が何かの折に権力者の目に止った時、その権力者を寿ぐ表現により、受難を回避する工夫・配慮をすることもありえたのではなかろうか。

採り上げた連歌の張行の時期・その折の人々のあり様を考え合わせると、このような推測を行ってみたくなってしまう。

なお、この付け合いについて、前述したが補足すべきことがあり、次稿に記したい。

(山形大学名誉教授)

# 義光と寒河江肥前守の辞世

片桐繁雄

最上義光が亡くなったのは、旧暦一月十八日。太陽暦では二月二十六日、余寒なお厳しい時節である。晴れた夜なら満月に近い月は、冷たい光を地上に投げかけるだろう。

さて、石川県金沢市の研究者から歴史館に手紙が届いた。金沢の研究者皆様はテキストとしている『政隣記』の一節をコピーして下さったものだ。

最上駿河辞世并詠哥

一生居敬全  
今日命帰天  
六十余霜事  
对花拍手眠

有といひ無しと教へて久堅の  
月白妙の雪清きかな

先様の疑問は、これが確かに「最上駿河守家親」の作だろうかということのようであったが、こちら側としては、瞬間的に「これは大変。ひよつとしたら義光の？」という受け取り方になっていた。

「最上駿河守家親」なら、元和三年没。年齢三十六歳であるから、「六十余霜」とは合わない。亡くなったのは三月六日（太陽暦四月十一日）とされているから、春爛漫ではあっても、「久方の月の光、白妙の雪」といった景物からは程遠い。さらに亡くなる前、二晩ほど苦しんだとする記録もあるのだから、悠々と雪・花・月を愛でつつ、咲いた花にまで感謝しながら命終を迎えるという達観した境地には、これまたほど遠過ぎる。

義光晩年に至りついた澄み通った心境が、この辞世に脈々と通っていると見る

のはたして僻目だろうか。ということ、この漢詩（五言絶句）と、和歌一首は、まず義光の作と見て誤りあるまい。

葬儀は義光がみずからの菩提寺として建立していた「慶長寺」で執り行われた。二月六日（三月十六日）、春分近いころで日没は寅の刻、午後五時半ごろになる。その夕刻に、義光公の黄泉（よみ）路の旅にお供しよう、みずから生命を絶つた四人の家臣がいた。

長岡但馬、山家河内、寒河江十兵衛、それにもう一人。辞世の句を残した寒河江肥前守である。肥前守は義光の地域統一戦のなかで敗北した寒河江氏一族だったと思われる。戦後は義光に帰参して幕下に入った人物と思われる。「最上義光分限帳」では最上一族以外ではトップの酒田の志付九郎兵衛三万石について、第二番目に寒河江肥前守二万七千石が挙げられている。秋元本・伊藤本山形城内図、守春本城下図、どの絵図でも廓内に広大な屋敷を与えられている「寒河江新二郎」は、「肥前守」の子なのではあるまいか。

彼の辞世は、『最上中興事略』という最上家伝来の古記録に採録されている。この本は、全体が漢文風。平仮名で書くべき部分まで万葉仮名風に漢字を当て、ひどく読みにくいのが、ここでは読みやすい通常の文字使いになおして掲げてみる。

神去りまします悲しみに堪えず、従いまつらんと、今日死出の山形を立ち別るれば、三途（みつせ）は最上川なれや。うち渡らんと思ひつめ、

霧となり霞と消ゆる夕べかな

葬儀が終えたこの時は、早春の山形盆地もやや暖かに、ほのかな夕霞が消えてゆこうとする季節に変わりつつあったのだらう。

## 令和3年度事業

### 1. 展示事業

#### (1) 常設展示

最上義光を主とした最上家関係資料と山城関係資料、山形に関わる文化財などを展示紹介しながら一部コーナー展示を行います。

①企画展示Ⅰ「(仮称) 鐵の美 2021」  
(4月7日ー7月4日)

②企画展示Ⅱ「(仮称) 武士好みのデザイン」  
(7月11日)

③企画展示Ⅲ「(仮称) 収蔵名品展 屏風絵」  
(11月11日)

④企画展示Ⅳ「(仮称) 最上義光と連歌」  
(1月13日)

### 2. 普及啓発事業

#### (1) 歴史講座

①こども講座（小学校出張講座）  
山形市内の小学校に出向いて最上義光を学ぶ機会をつくり、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心の育成を図ります。

#### (2) ボランティアに係わる事業

最上義光と最上家を啓蒙することについて歴史館とともに活動する市民が、ボランティアという形で歴史館のサポーターとなつて、来館者の多様化するニーズに応え、きめ細かなサービスの提供を図るとともに、歴史館を核としたコミュニティを創出します。（年1回サポーターを募集します）

・「義光塾」  
・「現地研修会」

※詳細については最上義光歴史館にお問い合わせください。

## 表紙の写真

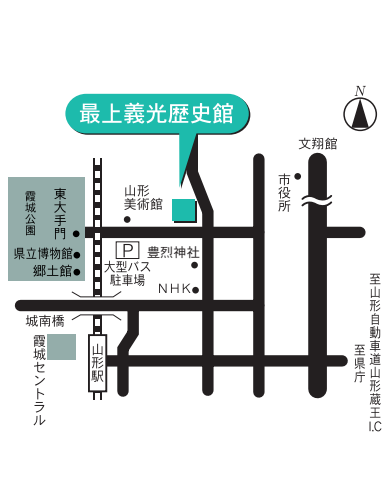
谷地城跡は、河北町役場庁舎の建替に伴い令和元年五月から八月にかけて、初めての大規模な発掘調査が山形県埋蔵文化財センターによって行われました。調査の結果、建物群と区画溝だと考えられる多数の柱穴と溝跡が発見されました。

表紙写真は調査区内の東西方向に伸びる溝で、広い所で幅4m、深さは70〜90cm前後を測り、陶磁器類、漆器、木製品、石製品、金属製品など多数の遺物が出土しました。年代の判断できる出土遺物と周辺の遺構との関係から、この溝は十六世紀中頃に機能し十七世紀前半には埋没していたと考えられ、文献上で推定されてきた谷地城の存続期間と合致します。

## ご利用について

開館時間 午前9時から午後4時30分  
入館料 無料  
休館日 月曜日(国民の祝日となる場合はその翌日)  
12月29日から1月3日  
交通 JRR山形駅より徒歩約15分  
大手町バス停留所より徒歩1分

## 来館案内図



令和3年3月発行  
編集・発行 公益財団法人山形市文化振興事業団  
最上義光歴史館  
〒990-1004  
山形市大手町1-153  
☎023-1625-1153  
☎023-1625-17100  
☎023-1625-171002  
http://mogamiyoshiki.jp

印刷 株式会社大風印刷

